



川系男子の『川と人』めぐり No. 18～北陸地方の川～

坂本貴啓（筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ）

『川と人』
めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きではない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介していきます。

♪更け行く秋の夜 旅の空の わびしき思いに 一人悩む
恋しや故郷 懐かし父母 夢路にたどるは 故郷の家路
(唱歌『旅愁』 訳詩：犬童球溪，作曲：ジョン・P・オードウェイ)



図1 大日ヶ岳（庄川・長良川流域界沿い）を登山



図2 庄川河口の解散式

1. 旅のおわりは新たな旅のはじまり

2013年8月28日（水）～31日（土）に庄川にゼミ合宿に行った。ゼミ合宿は毎年夏の終わりに行われる『川と人』ゼミの恒例行事で一つの川を3泊4日で旅する。僕がゼミに入ってから米代川（2010年）、天塩川（2011年）、那賀川（2012年）で今年は庄川。今年は旅の仲間に島根大と神戸大の河川の研究室も加わり、19名とともに賑やかな旅となった。

長良川から流域界を越え、庄川流域にはいる。大日ヶ岳を登り、尾根線沿いに庄川と長良川の分水嶺を感じ、上流域ではいくつもの連続した発電ダム群、中流域では流域内に残る合掌造りの集落、下流域では砺波平野の黄金色に色づいた散居村集落を望む。そして4日間旅して最後に辿りついたのは庄川の河口。河口で行われる解散式は先生がただ一言「では、解散！」と言ってあっけなく終わる。同時に夏の終わりが来ていることを知る瞬間でもある。今年は解散直後仲間と別れ、夏の終わりの北陸地方の自身の河川調査をスタート。旅の終わりは新たな旅のはじまりである。

表1 北陸地方の『川と人』めぐり訪問先

日付	午前	午後	訪問先
8月28日(水)	ゼミ合宿in庄川流域	ゼミ合宿in庄川流域	
8月29日(木)	ゼミ合宿in庄川流域	ゼミ合宿in庄川流域	
8月30日(金)	ゼミ合宿in庄川流域	ゼミ合宿in庄川流域	
8月31日(土)	ゼミ合宿in庄川流域	小矢部川 手取川	小矢部川に学ぶ会 はりんこ塾
9月1日(日)	黒部川(上流)	常願寺川	黒部ダム 常願寺川の清流と桜を愛する会
9月2日(月)	常願寺川 梯川	神通川 黒部川	金沢河川国道事務所 石川県庁 富山河川国道事務所 富山県庁 くろべ水の少年団
9月3日(火)	黒部川	姫川 関川	黒部川河川事務所 生地の湧水 高田河川国道事務所 関川水辺クラブ
9月4日(水)	千曲川(信濃川)	信濃川	千曲川河川国道事務所 長野県庁 信濃川河川事務所 分水桜を守る会 大河津分水路
9月5日(木)	信濃川	阿賀野川	信濃川下流河川事務所 新潟県庁 北陸地方整備局 NPO法人新潟水辺の会 阿賀野川河川国道事務所
9月6日(金)	荒川	阿賀野川	神林さくらの会 清流荒川を考える流域ワークショップ 羽越河川国道事務所 阿賀川河川事務所
9月7日(土)	阿賀川(阿賀野川)	阿賀野川 つくば着	会津阿賀川流域ネットワーク 川の達人の会 猪苗代湖 NPO法人五泉トゲンの会



図3 小矢部川と小矢部川防災センター



図5 バケツをひっくり返したような大雨の手取川



図4 庄川と小矢部川の旧河道



図6 トミヨ (写真：はりんこ塾 HP より)

3. 手取川のトミヨ (はりんこ塾/美川自然人クラブ)
 小矢部川をあとにし、石川県白山市付近の手取川へ。手取川については大雨で視界が曇っていた(図5)。

手取川流域で活動する『はりんこ塾/美川自然人クラブ』の藤木克彦さんにお会いした。率直に藤木さんに「はりんこって何ですか?」ときいてみた。はりんこはトミヨ(図6)の地方名で、白山市(旧美川町)付近では「はりんこ」と呼ぶらしい。トミヨは背に7~10本のとげをもつ5cm前後の1年生の魚で、夏でも水温20℃以下の冷たい水のある湧水の湧き出るところでしか生息できない。産卵期の4月~7月には婚姻色で黒っぽくなり、縄張り・巣をつくり、子育てまでする。たった1年しか生きられない魚でかつ限定的な条件のもとでしか生きられない魚であるため、自然の健全さを知るバロメーターになるという。

そんなはりんこが棲む、この白山は豊富な自然を味わいに外から人に来てほしいという想いをこめて、はりんこをテーマとしたまちづくりを1993年から展開することになり、活動を『はりんこ塾』と名付けたという。

湧水を活かしたまちづくりをすすめ、2010年には「白山美川伏流水群」が平成の名水百選に指定され、活動にも再度熱がはいり、伏流水案内マップや案内看板の作成などがすすめられている。

はりんこをシンボルとした清らかな水を育むまちづくりが展開されている。

2. 小矢部川と自然体験 (小矢部川に学ぶ会)

解散後、庄川の隣の流域の小矢部川へ。小矢部川はもともと庄川とつながった川であったが、江戸時代の改修工事により、庄川から小矢部川は独立した水系となった(図4)。現在は庄川の合口堰などで取水された用水が田畑を潤したのちに、排水路を通り、庄川には戻らず、小矢部川に水を落している。分離された今でもこの2つの川は密接な関係を持っている。

そんな小矢部川には『小矢部川に学ぶ会』があり、訪ねた。小矢部川に学ぶ会は2002年に小矢部川の左岸側に福岡防災センターができたことをきっかけとして、発足。代表の吉田孝さんは、幼少の頃からこの小矢部川の流域で育ち、初夏にはコイやフナを捕まえ、夏には川遊び、秋にはミクリの実をとり、冬にはバイカモの花を見て育った記憶があるという。そういう経験を今の子供達もさせてあげたいと活動を開始した。四季折々の自然活動を体験させる中でジュニアナチュラルリストの子供達を何名も育ててきた。小矢部川で育った子供達が将来どんな活躍をしていくのか楽しみである。



図7 霧雨の黒部ダム



図9 ダムを忠実に再現した黒部ダムカレー



図8 念願の黒部ダムカード（レアカード）



図10 念願かなって記念撮影

4. 壮大なロマンの黒部ダム（黒部ダム）

9月1日。夢にまでみた黒部ダム。中学生の頃、NHKのプロジェクトXでの黒部ダム建設のドキュメンタリーを見て以来、あこがれ続けてきたダムである。2002年の紅白歌合戦で中島みゆきさんが黒部第四発電所のトンネルの中から「地上の星」を歌ったのにロマンを感じた人は多いのではないだろうか。当時はダムのことはなんとなくしか分からなかったが、子どもながらにこのダムはとてつもないダムなんだということだけは分かっていた。

ご存じの通り、黒部ダムは山奥深くにあるため車を自分で運転して行くことができない（自家用車を持っていく場合は回送サービスを利用する必要がある）。アクセスするためには全部で3つのルートがある。一つは「黒部ルート」と呼ばれるもので、ダム管理者である関西電力所有のトンネルによる輸送設備を利用したものがある。しかし、これは黒部ルート見学の抽選に当たった人だけが利用できるルートで一般開放はされていないので、現実的にアクセスは難しい。よって黒部ダムには他のダムに行く時のように川を遡っていくことができないため、他流域から山越えをしてアクセスすることになる。

二つ目は「扇沢ルート」。長野県信濃大町から路線

バスに乗って、扇沢でトロリーバスに乗り換え登って行くルートである。コストも安く、アクセス時間も短い便利なコース（片道所要時間16分、料金往復2,500円）。3つ目に「立山黒部アルペンルート」。立山駅からケーブルカー⇒高原バス⇒トロリーバス⇒立山ロープウェイ⇒黒部ケーブルカーと長時間コースがある（片道所要時間:79分、往復料金:10,490円）。今回は北陸にいたので、こちらからアクセスした。車窓からだけでも立山連邦は見事であり、険しい渓谷、長いトンネルを抜けていながら黒部ダムへの期待が深まるにつれ、よくこんなところにダムをつくったものだと感心する。

黒部ダムについては小雨が降っており、霧が立ち込めていた。霧の中見えてきたダムサイトからの放流は迫力が一段とあった（図7）。ダムサイトの横には殉職者慰霊碑が建っていたが、この過酷な自然環境の中に創り出したのは決死の覚悟が必要だったであろう。ダムの放流を眺め、ダムカード（図8）を手に入れ（売店でアンケートに答えるともらえるレアカード）、ダムカレー（堤体はアーチ式ご飯でエメラルド色のダム湖を表現したグリーンカレー）（図9）を食べて大満足の黒部ダムであった。日本の土木技術者あっぱれ！

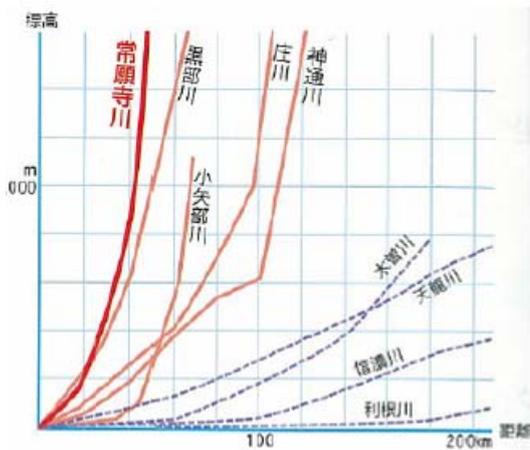


図 11 常願寺川の河床勾配(河川整備計画より引用)



図 13 生地の湧水



図 12 常願寺川の床固群

5. 日本一の河床勾配の川（常願寺川の清流と桜を愛する会）

黒部ダムを後にし、立山に戻ってきた頃には夕方。時間があれば立山砂防博物館など見学したかったがまた次の機会に。立山は日本三大崩れでも有名な崩壊地であり、そこを流れる常願寺川も砂防対策が施された河川である。明治時代、常願寺川の改修に訪れたヨハニス・デ・レーケが「これは川ではない、滝だ！」と言ったのは有名な話として残っている。ご存じの通り、日本の河床勾配の中で最も急勾配なのがこの川である（図 11）

また、廃藩置県の際に石川県と富山県は一緒だったが、常願寺川に災害が多いことから石川県と富山県は再び分離されたという。そんな荒々しい常願寺川の上流部を橋の上から覗き込むとそう言われるのがすぐに納得できた。そんな常願寺川で活動する『常願寺川の清流と桜を愛する会』の永山國男さんにお会いした。この会は 2005 年に発足。建設省（当時）が岩嶺野桜つつみモデル事業を進める際に川づくりに対する住民の意見を聴く集まりを常願寺川上流右岸、立山町末三賀、野村、岩嶺野、泊新地区の住民で発足。現在は独立した市民団体として、岩嶺野地区の床固め（図 12）付近での水生生物学学習や花見の拠点として賑わいを見せている。

6. 名水の里で（金沢河川国道事務所/石川県庁/富山河川国道事務所/富山県庁くろべ水の少年団）

9月2日。この日は忙しい日であった。午前中に金沢河川事務所、石川県庁へ行き、手取川と梯川に関する情報提供をしてもらい、午後からは富山河川国道事務所、富山県庁へ行き、常願寺川、小矢部川、庄川、神通川に関する情報提供をもらった。各機関のご協力もあって調査の方も順調である。途中、富山に来てから神通川を見てなかったもので、堤防に這い上がり、ちょっとだけ記念撮影。富山空港は神通川の河川敷に滑走路があるそうだが、使ったことがないのでぜひ一度使ってみたい。

金沢⇒富山と移動し、この日は黒部を終着に。夜、『くろべ水の少年団』の吉崎嗣憲さんにお会いした。くろべ水の少年団は1993年から活動をしている会で、黒部市付近の小学生の水環境教育に関する活動を中心に活動している。水の少年団という名前がなんともカッコいい！行っている活動の内容も非常に科学的である。水質測定の見測機器の使い方や水生生物の同定、実態顕微鏡の操作方法など幅広いメニューがある。最近の環境学習は自然を体験して完結するものが多く、本格的な理科的指導にまで発展した活動を行っているものは少ないように思う。これが可能なのも、会を運営しているのが理科の先生達を中心であるためだろう。

黒部と言えば名水なしでは語れない。大学のある水文学の先生が言っていたが、「黒部の水を1週間飲むとなんだか体の中の水分が全て入れ替わるようですがすがしい気分になるんだよね。」なるほど、これは分かる気がする。次の日には生地の湧水（図 13）を見学。海付近でありながら自噴している湧水群で、奥から飲料、野菜洗い、食器洗い、選択と洗い場に順序がついている。水も冷たく柔らかい触感でおいしい。

余談だが、9月2日は自身の誕生日。26歳。去年は仁淀川の一人旅で誕生日を迎えたが、今年は黒部川で後輩に誕生日を祝ってもらった。名水のもとで最高の誕生日を迎えた川系男子なのであった。



図14 夕暮れ時の関川



図15 大河津分水洗堰（信濃川本川側）

7. 関川の夢（黒部河川事務所/吉田科学館/高田河川国道事務所）

9月3日、午前中に黒部川河川事務所を訪問し、その後黒部川や吉田科学館、生地の湧水を見学した。今回調査で同行してくれた後輩は黒部川が地元であり、名水で育った彼女がちょっとうらやましくもある。

黒部を十分堪能したあと、新潟県上越市方面へ。高田河川国道事務所へ行き、姫川と関川の説明を聴く。また、事務所の数名の方も関川水辺クラブの会員であるそうなので、色々とお話を伺った。関川には『NPO法人関川水辺クラブ』がある。関川水辺クラブは2000年の建設省（当時）主催の「関川・川づくりワークショップ」で川づくりを考える機会に自由に関川についての夢を語り、関川の水辺がこうあってほしいという夢を絵に描いた。集会で集まったメンバーがその後も活動していこうと『関川水辺クラブ』を設立。その後も活動を続け、2002年に法人格を取得。現在も関川の代表的な団体の一つとして活動を続けている。

ん？ちょっとまてよ。この流れは僕の地元の遠賀川の直方川づくり交流会（1996年）の設立経緯によく似ている。50年後の遠賀川についての夢を行政も住民も一緒になって考え、遠賀川夢プランを提案している。その後、任意団体の直方川づくり交流会から分化するかたちでNPO法人直方川づくりの会を設立。この関川も住民参加で水辺をデザインしたというものだそう。九州と北陸なので、きっとお互いを意識したわけではないだろうが、同時期に同じプロセスを辿った団体であり、興味深い。

当時ワークショップで提案した内容は実際のところ2割程度しか実現はしなかったようだが、カヌー乗り場などは今でも関川で活動する時の発着拠点になっているようで、利用者も多い。少し夕暮れ時の関川を見学（図14）したが、堤防沿いを散歩する人が多く、川と住民の距離の近いものであった。関川に描いた夢はここに息づいている。

8. 千曲川・信濃川（千曲川河川事務所/長野県庁/信濃川河川事務所/認定NPO法人分水さくらを守る会/大河津分水/）

9月4日、昨晩のうちに高田から一旦長野県長野市へ。午前中に千曲川河川事務所と長野県庁を訪問し、情報収集。その後は千曲川沿いを電車で下り、中流域の信濃川河川事務所へ。その後、燕市の燕市方面へ向かい、大河津分水へ（図15）。大河津分水は1922年に完成した日本有数の分水路である。また、信濃川本川の下流にはもう1本、関屋分水路もある。竹村公太郎さんの土地の文明の一節では、「2本の分水路はそれぞれの役割を分担して、新潟平野の洪水を防止し、新潟平野の洪水を防止し、新潟平野の水はけを良くして日本海側最大の都市・新潟を誕生させていった。」とある。堤内一面に広がる黄金色の稲の平野はこの分水路なしでは成しえないものである。

そんな大河津分水で活動する『認定NPO法人分水さくらを守る会』を訪問。この会は2004年に設立した会で、大河津分水路堤防沿いの桜並木の手入れや植樹などを行っている。4月には見事な桜が堤防一面に咲き、多くの人で賑わうそうだ。2010年には認定NPO法人まで取得している。こうした河川管理は継続的にしていくのは手間もコストもかかり、全国的に課題になっていることが多いが、市民による堤防の管理が行われていることは大変すばらしい事例だと思う。

9. 記憶される美しい水辺の創造目指して（信濃川下流河川事務所/北陸地方整備局/NPO法人新潟水辺の会/阿賀野川河川事務所）

次の日（9月5日）、信濃川下流河川事務所と北陸地方整備局と新潟県庁を訪問した後に『NPO法人新潟水辺の会』を訪問。前々から各所で話を聞いていた会だったので念願叶っての訪問であった。

当日は会の代表であり、新潟大学の名誉教授の大熊孝先生、副代表の相楽治さんが対応して下さった。新潟水辺の会は1987年設立の会で（僕と生まれ歳が一緒！）、信濃川流域を中心として鮭の稚鮭の放流や



図 1 6 新潟水辺の会でのヒアリングの様子



図 1 8 荒川河川敷を流れる小川と桜

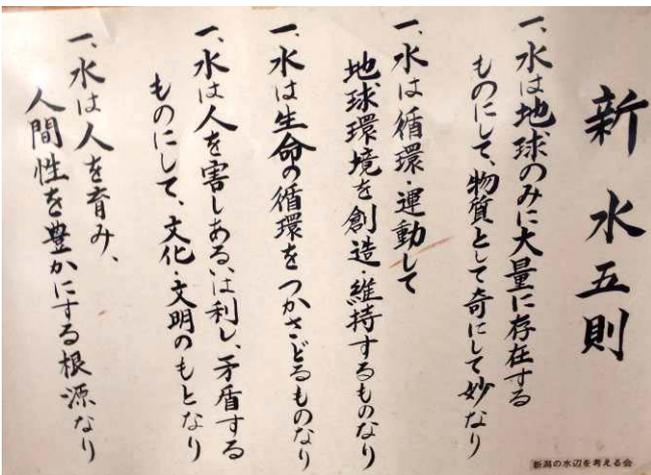


図 1 7 新水五則（大熊先生著）



図 1 9 自然再生事業で復元した湧水の湧くワンド

流域の各種調査などさまざまな活動を行っている。

設立は宮崎駿監修・高畑勲監督の「柳川堀割物語」の上映とシンポジウムの開催をきっかけとして、新潟県内の水辺環境について考える目的で発足。「柳川堀割物語」は福岡県の柳川の水路再生の話であるが、新潟で福岡の川の事例に着目して発足しているのは発足経緯として興味深い。

新潟水辺の会の拠点の「みずきのハウス」で色々とお話を伺う（図 1 6）。話が楽しく、あっという間に 2 時間以上経ってしまった。大熊先生から「今度ゆっくり来なさい。今度きたらここに泊めてあげよう。」遠慮なくそうさせてもらおう。最後に、部屋の一角に貼ってあった新水五則を見つけ、大変興味を惹かれた。水五則は黒田孝高（如水）がつくったものと言われ、以下のような水の性質を説いている。

（水五則：黒田孝高）

新水五則は大熊先生が説いたもので大変参考になるものだったのでここに掲載する（図 1 7）。

10. 湧水を活かしたワンドの自然再生（清流荒川を考える流域ワークショップ/神林さくらの会）

9 月 6 日、新潟県の村上市荒川から、荒川という川は全国各所にあるが、1 級水系としては関東を流れる荒川と北陸を流れる荒川の 2 つがある。『清流荒川を考えるワークショップ』の佐藤巧さんと『神林さくらの会』の佐藤治夫さんにお話を伺った。両会とも荒川の川づくりやまちづくりをどのように進めるかを考えることをきっかけにスタート。荒川では河川敷にオーナー桜を植えており、桜 1 本 1 万円でオーナーになる制度だ。オーナー桜はその後、会の人々が中心となり、しっかりと育成している。また、河川敷は公園利用できるようにしっかりと整備されていて、支流の小さな川も合流してきている（図 1 8）。

お話を伺った後、羽越河川国道事務所に行き、お話を伺っていると川づくりの現場を案内していただいた。河川敷として埋められてしまったワンドを湧水の湧き出る場所を掘削して復活させ、湧水の湧くワンドがトミヨの貴重な生息場になっている

（図 1 9）。ワンドの自然再生は日本各所で聞くが、数年後にはたまり水になり、水質が悪化する例もある中、ここは成功事例としてモデルケースであるべきだろう。



図 2 0 所長と事務所の方と記念撮影



図 2 1 住民団体による草刈りが行われる阿賀川

1 1. 阿賀野川と阿賀川（阿賀川河川事務所/NPO 法人会津阿賀川流域ネットワーク/NPO 法人五泉トゲソの会）

荒川を後にし、北陸調査最後の河川の阿賀野川流域へ。阿賀野川を上流の会津若松の方までさかのぼる。阿賀野川は福島県に入ると、阿賀川と呼ばれる。阿賀野川を遡って行くと風光明媚な山間の風景に変わっていった。しかし、会津若松に入った途端に平野が開けた。上流に登っていたはずなのに違和感のある印象。会津若松は盆地なのだ。盆地を貫流し、その後、勾配を急にして、新潟の方へ流れる。平日の金曜日最後の訪問先として、阿賀川河川事務所へ。担当者の方のもとを訪ねて、お話を伺おうとすると、「その前に、うちの所長がちょっと会いたいと言っていますので、所長室へどうぞ。」ん？ボク、何か悪いことしたかな？北陸最後の事務所にして、川系男子、とうとう北陸河川のブラックリストに載ってしまって、怒られるのか？恐る恐る所長室へ。「やあ！坂本君！久しぶり！私のこと覚えているかい？」一瞬頭が点になってしまったが、聞き覚えのある声と見覚えのあるお顔。記憶はすぐに蘇ってきた。昔、4年生の頃につくばの国総研の河川環境研究室に夏期実習で行った際にお世話になった池田さん

だ！「君が全国調査で周っていることを聞いたんでね、元気かなと思って。」これはうれしい再会だった。実は阿賀川以外でも、信濃川河川事務所でも以前国総研に勤めていた人が課長さんとして赴任されており、「坂本君が来るってきいてびっくりしたよ！」当日は出張で会えないけど、何か知りたいことなどあればいつでも言ってね！」とうれしいお言葉をいただいた。川の縁は本当に素晴らしいものだと思身染みて思う。これからもご縁を大事にしていきたい。

事務所長から激励を受け、その後、色々と阿賀川に関する説明を受けた後に、事務所を後にした。

翌日（9月7日）に『NPO 法人会津阿賀川流域ネットワーク』を訪問。代表の高橋利雄さんを訪ねた。

会津阿賀川流域ネットワークは川に学ぶという理念のもと、会津地域の発展に寄与することを目的に活動する団体である。2004年に設立。この会がすごいのは「河川管理は民の力でやれることはやる」ということ。もともと、会津地方の阿賀川は昭和30年代から河川の草刈りなどの河川管理は川の各地区の自治組織で行ってきた。その伝統は今でも引き継がれており、国の管理区間の草刈りは住民の手によって行われる（図21）。それを円滑に行えるように調整し運営を行っている。いま全国の河川の中で住民による河川管理がここまで徹底している川はどれくらいあるだろうか。おそらく阿賀川くらいだろう。今後、人口減少社会の到来で河川管理が同水準で行えるか懸念がある中、このような活動は新しい時代の河川管理の方策に一石を投じるかもしれない。

その後、阿賀川をもう少しだけ遡り、猪苗代湖へ。先月、東北地方調査の際にも猪苗代湖に来たが、東部の安積疎水側だったが、今回は阿賀野川への流出口である西部の方へ。阿賀野川のはじまる湖に敬意を表し湖を後にした。

最後に向かったのは五泉市にある『NPO 法人五泉トゲソの会』。常務理事の中村吉則さんのところでお話を伺った。

このトゲソというのは、イバラトミヨのことで、このあたりの地方名でトゲソと言うらしい。手取川でははりんこだったが、ここも異なっていて面白い。

この会では周辺の湧水群に生息するトゲソを守るため、生息調査を行ったり、繁殖用の水路をつくったりする活動を2006年より行ってきた。トゲソを通じて人々に伝えられることはたくさんあると中村さんは言う。「トゲソは売ることも食べることもできない。飼うこともできない。でもお金の換えられない価値がある。」トゲソという限られた環境の中でしか生きられない魚だからこそ、環境の変化に敏感で、人が普通に生活している分には気がつかない微妙な変化をいち早く感じ取ってくれる。

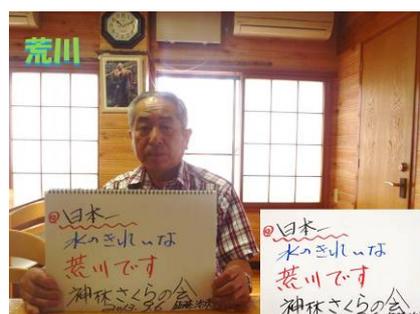
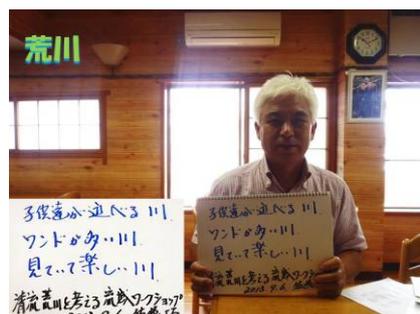
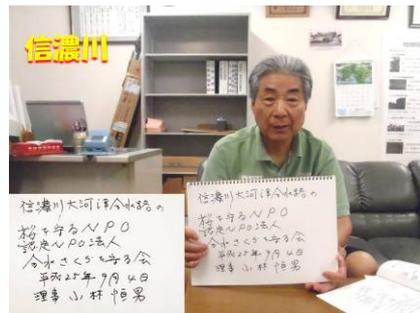
最近では、トゲソ米というブランド米をつくって販売し、その売上げの一部を活動費に充てるというユニークな活動も展開されている。

トゲソという魚に学び、北陸地方の川を後にした。

12. 旅のおわりに

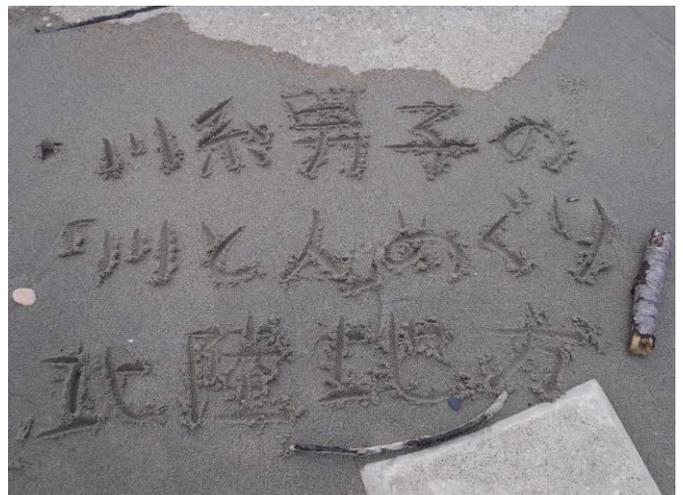
今回、ゼミ合宿まで入れると11日間（8月28日～9月7日）の北陸地方の訪問であった。秋の北陸地方はどこも稲穂が黄金色に広がり、流域の豊かさを表していた。今回各流域を周るに当たり、お世話になった市民団体の方、行政の方への感謝はもちろんのことだが、各河川の事務所の紹介や各河川の市民団体の情報のとりまとめをして、北陸地方の調査をサポートして下さった北陸地方整備局の横山優樹さんに感謝申し上げる。僕と同年の河川管理者が日々北陸の川のために仕事をしているのは素直にかっこいい。僕も日本の川のために今自身にできることはなんなのか自問自答をせずにはいられなかった。今回の調査で九州、中国、四国、東北、北陸を一通り巡り、不十分さはあつつも65水系情報を集めてまわったことになる。109水系まであと半分を切った。新年の誓いは実現できるのか？いや実現してみせる。

最後に今回ゼミ合宿後そのまま北陸地方の調査に同行してくれた能登江梨香さん、井坂七星さん、木村夏菜さんありがとう。



- ・ 滞在日数: 7日間(ゼミ合宿入れて11日間)
- ・ ダムカード獲得枚数: 2枚
- ・ 訪ねた川の学習館等: 0施設
- ・ 訪ねた河川事務所: 9機関
- ・ 訪ねた川: 12水系
- ・ 名刺交換した人数: 44名
- ・ 出会った市民団体: 10団体
- ・ 出会った行政の人: 29名
- ・ 旅で出会った人: 約100名

川系男子の 北陸地方「川と人」めぐり



【筆者について】

坂本 貴啓 (さかもと たかあき)

1987年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC（青少年博物学会）、大学時代ではJOC（Joint of College）を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢んでいる。

筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 構造エネルギー工学専攻在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『河川市民団体における活動量の定量的分析』と題し、河川市民団体の活動がどの程度河川環境改善の潜在力を持っているかについて研究中。最近のお気に入りには秋の川らしさを探ること。

